

Title	『源氏物語』若紫巻「あしわかかの浦」について：紫の上の登場とその背景
Author(s)	金田, 圭弘
Editor(s)	
Citation	百舌鳥国文. 19, p.27-38
Issue Date	2008-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/14062
Rights	

『源氏物語』若紫卷「あしわかか浦」について

—紫の上の登場とその背景—

金田圭弘

一

『源氏物語』若紫卷が『伊勢物語』と関わりの深いことについては、既に多くの論がある。例えば、後藤祥子氏は「源氏の北山行が初冠段に擬されていることといい、藤壺とのあやにくな逢瀬が二条后を想起させることといい、あるいは少女若紫をめぐる応酬が定家本四十九段を踏まえていることといい、この巻が伊勢物語世界に想を負っていることはすでに言い尽くされた観がある」と述べておられる¹⁾。また、若紫卷について、林田孝和氏は「この巻の主要なテーマは若紫発見にあるはずである」とされる²⁾。

その若紫、後に紫の上と呼ばれるようになる少女は、新潮日本古典集成『源氏物語 一』によれば「源氏、僧都の坊に美しい少女（後の紫の上）を垣間見る」と小見出しに記される場面（一

八九頁）から登場してくる。注目したいのは、『源氏物語』の中で重要な登場人物の一人である彼女が、同じ集成本によれば「源氏、明石の浦に住む前播磨の守入道とその一人娘の噂を聞く」と小見出しに記される場面（二八五頁）の直後に登場することである。

小見出し中の「その一人娘」は、若紫卷からはずっと後の明石巻に登場し、光源氏が須磨から明石に移動した際に出逢う明石の御方である。物語の展開において、明石巻に先行する若紫巻の主人公であるはずの紫の上より先に、明石の御方が源氏たちの話題に上る設定となっているのである。

「源氏、明石の浦に住む……」の段落直前には、

きよげなる童などあまた出で来て、因伽奉り、花折りなどするもあらはに見ゆ。「かしこに女こそありけれ」、僧都は、よも、さやうには据ゑたまはじを、「いかなる人なら

む」と口々言ふ。下りてのぞくもあり。「をかしげなる女子ども、若き人、童べなん見ゆる」と言ふ。

(小学館新編日本古典文学全集『源氏物語 一』二〇一頁)

とあり、「をかしげなる女子ども」の中に紫の上も含まれるのだからうとは思われるが、光源氏本人が直接、紫の上を確認し、それと認識したわけではない。やはり彼女の登場は、右の小見出し「源氏、僧都の坊に……」の場面からであると考えられる。

若紫巻において、明石の御方を含めた、いわゆる明石一族が紹介される点などをめぐっては、武田宗俊氏、風巻景次郎氏、阿部秋生氏などの諸氏により、『源氏物語』全体の構想論として論じられてきた。⁽⁴⁾しかし、須磨巻・明石巻における明石の御方の年齢から逆算した若紫巻における明石の御方の年齢が、結婚適齢期であるとは考えられないといった問題等が、長谷川和子氏によって指摘されてから、物語全体の構想論にはなかなか進展が見られない。

近年、坂本共展氏は、正篇を「冷泉帝構想」「明石姫君構想」「女三宮構想」「紫上構想」と四つの構想とそれぞれ四つの主題に分けられ、紫の上は「明石姫君構想」の中では、あくまで脇役とされている。⁽⁵⁾そうはいうものの、紫の上は、若紫巻においてはやはり主役であり、主人公的位置にあるといつてよい。明

石の御方も『源氏物語』の重要人物のうちの一人で、明石巻においては主人公ともいえるのであるが、その明石の御方を若紫巻において伏線的な形で登場させ、しかも若紫巻の主人公である紫の上よりも先に紹介していることは、物語の展開の上で、どのような意味を担っているのであろうか。作者はそこなどのような意図を持っていたのであろうか。

二

若紫巻の主人公紫の上は、若紫巻よりも後に語られる明石巻のヒロインともいえる明石の御方のことが噂にのぼった後に、

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。
中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎
えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似る
べうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌
なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はい
と赤くすりなして立てり。(一・二〇六頁)

と、物語に登場してくる。さらにその少女は、

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちげぶり、い
はげなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。
ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さる

は、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

(一・二〇七頁)

と記されている。

光源氏が密かに思いを寄せる藤壺の面差しのようなこの少女は、彼女の保護者である尼君からは、

生ひたたむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき
(一・二〇八頁)

と、「若草」に喩えて詠まれ、続いて「ゐたる大人」が「げに」と泣いて詠んだ、

初草の生ひ行く末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ
(同)

などでは、「初草」に喩えられている。また、僧都の坊で眠られぬままに、光源氏が取り次ぎの女房を介して尼君に贈った歌、

初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ
(一・二一六頁)

では、尼君が喩えた「若草」と「ゐたる大人」が喩えた「初草」とを合わせたような「初草の若葉」に喩えて詠んでいる。このように、紫の上が「若草」や「初草」といった歌語に喩えられるのも、先述した『伊勢物語』の影響によるものとされる。

「若草」や「初草」に喩えられる紫の上であるが、光源氏はさらに、

夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ
(一・二二二頁)

面影は身をも離れず山桜心のかぎりとめて来しかど

(一・二二八頁)

と、紫の上を「桜」にも喩えている。そして、光源氏が、紫の上を「桜」に喩えた歌を詠んだのに対し、右に引いたように、紫の上を「若草」に喩えた歌を詠んだ尼君も、

嵐吹く尾上の桜散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ
(一・二二九頁)

と、紫の上を「桜」に喩えて詠んでいる。

結局、紫の上は、若紫巻以降、野分巻で夕霧が六条院で紫の上を垣間見る場面、

気高きよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。

(三・二二六頁)

や、若菜下巻の、

紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小桂、薄蘇芳の細長に御髪のためれるほど、こちたくゆるるかに、大ききなど

よきほどに様体あらまほしく、あたりにほひ満ちたる心地して、花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるだけはひとものしたまふ。
(四・一九二頁)

などでも、「桜」に喩えられている。この喩えに関して、柏木由夫氏は「若紫巻での紫の上への比喩は、次第に『桜』に統一されてゆき、そうして最期まで一貫し、彼女は終生桜の面影をもつて語られる人物である」と述べておられる。

このように、物語に登場した時から「若草」「初草」さらに「桜」に喩えられ、喩えられるものが定まっている感のある紫の上であるが、光源氏と紫の上とが直接対面を果たそうとする重要な場面では、光源氏は紫の上について、

あしわかか浦にみるめはかたくともこは立ちながらかへる
波かは
(一・二四二頁)

とも詠んでいる。この歌は、尼君が亡くなった後、「忌みの期間」が過ぎた紫の上を、光源氏が京の家に尋ねた折に詠まれている。

「何か、かうくり返し聞こえ知らする心のほどを、つつみたまふらむ。その言ふかひなき御ありさまの、あはれにゆかしうおぼえたまふも、契りことになむ心ながら思ひ知られる。なほ、人づてならで聞こえ知らせばや。

あしわかか浦にみるめはかたくともこは立ちながらか

へる波かは

めぐましからむ」とのたまへば、「げにこそいとかしけれ」とて、

寄る波の心も知らでわかか浦に玉藻なびかんほどぞ浮きたる

わりなきこと」と聞こゆるさまの馴れたるに、すこし罪ゆゑをされたまふ。
(一・二四二頁)

と、紫の上の後見人である少納言と歌を贈答する場面で、光源氏が紫の上に対する思いを歌に託して詠んだものである。

この「あしわか」の歌に関して、『奥入』(定家自筆本)は、あしわかか浦にきよする白浪のしらじな君は我おもふともを引いている。この歌は、『古今六帖』第五「いひはじむ」の題に収められた二五四三番歌である。「いひはじむ」は、異性に愛のこぼを初めて伝えることである。光源氏がこの直後、初めて紫の上と直接向き合うことになることを考えると、定家が『古今六帖』の「いひはじむ」の題の一首を参考に引いているのは、「あしわかか浦」の典故としてばかりでなく、物語の場面の注としても極めて適切であるといつてよい。

さらに、古注を追ってみると、『花鳥余情』¹⁰⁾は、

あしの葉のわかきによせて、若浦をあしわかかのうらといへ

るにや。ここにはわか君になずらへていへり。対面はなくとも、よらでは、いかがかへるべき心なり。

と、紫の上を「わかのうら」に喩えていると注釈している。

これまで述べてきたように、紫の上は「若草」「初草」「桜」などの植物系のもに喩えられてきたが、現在の注釈書でも、例えば、新編日本古典文学全集は、

葦の若芽の生える和歌の浦に海松布は生いにくくとも―姫君にお逢いするのがむずかしからうとも、寄せてきてそのまま立ち返る波のようなこのわたしだとお思いですか。

と訳し、頭注にも、

「あしわかの浦」は、葦の若芽が生えている和歌の浦のこと
で、若い意をかけて、紫の上をさし、その縁から「波」が源氏をさす。

とあり、古注に従った解釈を行っている。岩波日本古典文学大系、岩波新日本古典文学大系、新潮日本古典集成等、新編日本古典文学全集とほぼ同じ内容を記しており、解釈に揺れはない。

そこで、紫の上を「あしわかの浦」に喩えるという点をめぐって、以下に詳しく検討を加えてみたいと思うのであるが、その前に、『源氏物語』の本文の異同について一応確認しておきたい。

「あしわかの浦」の歌については、『源氏物語大成』では本

文異同は記されていない。また、『別本集成』には、「麦生本」と「阿里莫本」のみ「あしわかのうら」であることが記されている。当該歌の本文は、多くの諸本の本文通り「あしわかの浦」で特に問題はないと考えられる。

二

先にも引用したように、「あしわかの浦」は、光源氏が詠んだ、あしわかの浦にみるめはかたくともこは立ちながらかへる波かか

(一・二四二頁)

の一首に見えている。この「あしわかの浦」は、現在の諸注が示す通り、「葦の若芽が生えている和歌の浦」の意であるが、ここでは「紫の上」を喩えている。光源氏の歌に対する少納言の返歌「寄る波の心も知らで……」から、「あしわかの浦」と「わかの浦」とは同一地と考えてよいだろうと思われる。

それにしても、これまで紫の上を「若草」などの植物系の歌語に喩えてきたのにもかかわらず、「葦」を詠み込んでいるとはいえ、「(あし)若の浦」という地名に喩えているのは、いかにも唐突な感じがする。

『新編国歌大観』を検する限りでは、『源氏物語』以前に「あしわかの浦」を詠み込んだ和歌は、先にも引用した定家の『典

入」以来の古注所引の、

あしわかの浦にきよする白浪のしらじな君は我おもふとも

(古今六帖・「いひはじむ」・二五四三)

が存するのみである。また、「あしわか」を詠んでいる例も、『源氏物語』以前には、『元真集』に、

なにはがたこげどを船はあしわかのえさるほどこそひさし

かりけれ

(六〇)

が見えるのみである。

「あしわか」について、現代の身近な辞典を繙くと、『日本国語大辞典』(第二版)には、「あしかび(葦牙)に同じ」とあり、「あしかび」については、「葦の若芽。若い葦。あしづの。あしわか。」と記している。また、『角川古語大辞典』には「若の浦に葦の若いのを言いかけた歌語」とある。もともと用例が少ないためか、「あしわか」の具体的な意味はいまひとつ判然としない。

『源氏物語』のこの場面で、先行例のほとんどない「あしわか」を含む「あしわかの浦」という表現を取って作者が用いたのは、やはり何か意図するものがあつたのではないかと考えられる。

『源氏物語』の執筆時代よりは少し早いかと思われるが、曾禰

好忠が、

三島江につのぐみわたる蘆の根のひとよのほどに春めきに

けり

(後拾遺・卷上・四二)

と詠んだように、「つのぐむ蘆」は春の到来を告げるものである。この「つのぐむ蘆」、それと同様の「蘆の若葉」など、「若草」や「初草」などの若々しい草に喩えられてきた紫の上の喩えとしても似つかわしいといつてよいだろう。

ここで、「あしわかの浦に……」の歌について言えば、作者は当該歌の「あしわかの浦」に、掛詞によって、紫の上を「蘆若」と「若(和歌)の浦」の二重に喩えていることになる。そして、「蘆若」が「若草」や「初草」と同類の比喩だとすれば、作者の主眼は、紫の上をさらに「若(和歌)の浦」に喩えることに置かれていたと考えてもよいのではないかと思われる。それゆえに、光源氏歌を受けた少納言の返歌にも「若(和歌)の浦」と詠まれているのであろう。

なお、紫式部と同時代の『赤染衛門集』に、

人のむすめのをさなきをけさうしけるに、まだてもか
かずとてかへりこもせめにやらんと、たかちかがい
ひしにかはりて

わかの浦のしほまにあそぶはま千鳥ふみすさぶらん跡なを

しみそ

(二二八)

の一首が収められており、幼い女性に関して「若（和歌）の浦」を詠み込む例が、『源氏物語』以外にも見られる。しかし、光源氏歌のように、「蘆若」と「若（和歌）の浦」の二重に喩える例は他に見出すことができないようである。

四

紫の上の喩えとしては、これまで言及してきた「若草」「初草」「桜」「あしわかか浦」のほかに、光源氏の歌に、

いはけなき鶴つるの一声聞きしより葦間になづむ舟ぞえならぬ

(一・二三八頁)

と、「鶴」に喩えた例もある。『源氏物語』のなかで、紫の上を「（いはけなき）鶴」に喩えているのは、「あしわかか浦」と同じくこの一例のみである。若紫巻において、この歌は「あしわかか浦に……」の一首よりも前に詠まれており、しかもともに光源氏が詠んだ和歌であるから、「あしわかか浦に……」の歌と何らかの繋がりがあるのではないかと思われる。

「若（和歌）の浦」は、現在、和歌山県和歌山市の「和歌浦」としてよくその名を知られている。『続日本紀』の聖武天皇・神亀元年十月五日の条（一）に、

○辛卯、天皇幸紀伊国。○癸巳、行至紀伊国那賀郡玉

垣勾頓宮。○甲午、至海部郡玉津嶋頓宮、留十有余日。

○戊戌、造離宮於岡東。（中略）又詔曰、登山望海、此間最好。不勞遠行、足以遊覽。故改弱浜名、為明光浦。宜置守戸、勿令荒穢。春秋二時、差遣官人。奠祭玉津嶋之神・明光浦之靈。

とあり、元々の地名は「弱浜」であったのを、詔によって改め「明光浦」としたと記されている。ただし、「明光浦」の名称は広まらず、この行幸に供奉した山部赤人が、

若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る

(万葉・卷六・九一九)

と詠んで以来、「明光浦」よりも「若（和歌）の浦」として、その名は赤人歌とともに人口に膾炙した。

ところで、「いはけなき」の歌について、『源氏積』は、
みなと（いはけなき）のたななしをぶねこぎかえりをなじ人や恋
わたり（いはけなき）なん

を引き、『奥入』は、

みなと（いはけなき）のあしわけをぶねさはりおほみおなじ人にやこ
ひむと思し

を引いている。がしかし、光源氏の「いはけなき……」の歌では、赤人が詠んだ「若の浦に……」の歌に見える「鶴」に紫の

上を喩え、また赤人歌の「葦辺」に対して「葦間」が詠み込まれている。とすると、「いはけなき……」の一首は赤人の「若の浦に……」の歌を想起させ、続く「あしわかぬ浦に……」の一首において、「若（和歌）の浦」に紫の上を喩える伏線としての意味があつたのではないかと考えられる。

作者が紫の上を「若（和歌）の浦」に喩えたり、あるいは関連づけようとする意図は、若紫巻以外にも見出すことが出来る。次は明石巻において、光源氏が明石の御方と初めて逢う直前の場面である。

忍びてよろしき日みて、母君のとかく思ひわづらふを聞きいれず、弟子どもなどにだに知らせず、心ひとつに立ちゐ、輝くばかりしつらひて、十二三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜」と聞こえたり。君はすきさまやと思せど、御直衣奉りひきつくるひて夜更かし出でたまふ。御車は二なく作りたれど、ところせしとて、御馬にて出でたまふ。惟光などはかりをさぶらはせたまふ。やや遠く入る所なりけり。道のほども四方の浦々見わたしたまひて、①思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ②恋しき人の御事を思ひ出で聞こえたまふに、やがて馬ひき過ぎて赴きぬべく思す。

秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居をかけれ時のまも見ん

とうち独りこたれたまふ。

(二・二五五頁)

右の傍線部②の「恋しき人」とは、いうまでもなく「秘紫上也」(『岷江入楚』)とあるように、紫の上のことである。明石の御方と逢う寸前になって、光源氏は京にいる紫の上を思うのであるが、傍線部①の「思ふどち見まほしき入江の月影に」について、『源氏釈』は、

思どちいざみにゆかんとまつしま入えのそこ(こゝろ)にしづむ月かけ

を引き、また定家の『奥入』も同じ歌を引いている(傍書なし)。『源氏釈』『奥入』が引く歌に見える「玉津嶋」は、「若（和歌）の浦」に関わる地名である。先に引いた聖武天皇の神龟元年十月の行幸の記事によれば、天皇は玉津嶋の仮宮に滞在し、岡の東に離宮を造らせ、その地の風景を愉しんでいる。

前出の山部赤人の『万葉集』巻六・九一九番歌は、この行幸に従った折の詠であることを示す題詞「神龟元年甲子冬十月五日、幸于紀伊国一^二時、山部宿祢赤人作歌一首并短歌」を有する九一七番の長歌、

やすみしし わご大君の 常宮と 仕へ奉れる 雑賀野ゆ

そがひに見ゆる 沖つ島 清き渚に 風吹けば 白波騒き
潮干れば 玉藻刈りつつ 神代より 然そ貴き 玉津嶋山
の反歌二首のうちの一首として詠まれたものである。こうして
みると、玉津嶋と「若（和歌）の浦」は密接な関わりがある、
というよりも、玉津嶋とは「若（和歌）の浦」のことで、玉津
嶋といえは「若（和歌）の浦」を指すといつても過言ではなさ
そうである。

作者は若紫巻では紫の上を「若（和歌）の浦」に喩え、明石
巻では「若（和歌）の浦」と密接に関わる「玉津嶋」を詠んだ
歌を引歌としているのである。しかも、その前あるいは後に明
石の御方が登場しているのである。

五

ここで、再び話題を若紫巻に戻したい。若紫巻は北山を舞台
に展開されはじめる。わらわやみを煩った光源氏は、北山の聖
の僧坊を訪れ祈禱を受ける。僧坊を出た後、京の風景を眼下に
見下ろしながら、光源氏と供の者との間では、富士山や浅間山
とされる「なにがしの獄」、西国などの「人の国」のことが話題
となる。続いて、

近き所には、播磨の明石の浦こそなほことにはべれ。何

のいたり深き隈はなけれど、ただ海のおもてを見わたした
るほどなん、あやしく他所に似すゆほびかなる所にはべる。

(一・二〇二頁)

と、明石の地が紹介され、明石の御方の話題に及んでいく。

明石の地名は、『万葉集』にも、

燈火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず

(卷三・二五四)

天さがる鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

(同・二五五)

見渡せば明石の浦に燭す火のほにそ出でぬる妹に恋ふらく

(同・三二六)

我が船は明石の水門に漕ぎ泊てむ沖辺な離りさ夜ふけに

けり

(卷七・二二九)

などと詠まれているが、当時の人々が「明石」と聞いてまず思
い浮かべたのは、

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行行く舟をしぞ思ふ

(古今・羈旅・四〇九)

の一首であろう。左注には「このうたは、ある人のいはく、柿
本人麿が歌なり」とあるが、『源氏物語』の時代、この歌は人麿
の代表歌として人口に膾炙していた。⁽¹⁵⁾

当代を代表する歌人藤原公任は、「ほのぼのと」の歌を『金玉集』『前十五番歌合』『深窓秘抄』『和漢朗詠集』『三十六人撰』といった秀歌選などに人麿歌として収め、六条宮具平親王撰の『三十人撰』も「人麿十首」の中に入れてある。このように、紫式部の時代には「ほのぼのと……」の歌は人麿歌として通用していたのである。しかも、公任は『和歌九品』において、上品上 これはことばたへにしてあまりの心さへある也。の例歌としてこの歌を挙げ、九段階のうちの最高ランクに位置づけているのである。

さらにまた重要なことは、この「ほのぼのと……」の歌を『金玉集』雑において赤人の「和歌の浦に……」の歌と並べ（四七、四八）、『前十五番歌合』の十五番で番わせていることである。この二首は好一对の秀歌として扱われたのである。また、周知のごとく、『古今集』仮名序には、

かの御時に、正三位柿本人麿なむ歌の聖なりける。これは、君も人も身を合はせたりといふなるべし。秋の夕、龍田河に流るる紅葉をば帝の御目に錦と見たまひ、春の朝、吉野の山の桜は人麿が心には雲かとのみなむ覚えける。また山部赤人といふ人ありけり。歌にあやしく妙なりけり。人麿は赤人が上に立たむことかたく、赤人は人麿が下に立

たむことかたくなむありける。

とあり、人麿と赤人は並称されている。そして、仮名序古注（公任の手になるとされる）は、この箇所において、人麿の代表歌二首の中に「ほのぼのと……」を、赤人の代表歌二首の中に「若の浦に……」を挙げていたのである。

したがって、当時の人々が「明石」の地名を聞いて、すぐに思い浮かべるのは「ほのぼのと……」の人麿歌であつたろうし、次いで赤人の「若の浦に……」の歌を連想するのは容易であつたにちがいない。

作者は若紫巻において、紫の上の登場の前に明石の御方を光源氏たちの話題の中で先に登場させ、次いで登場した紫の上を「若（和歌）の浦」に喩えている。これによって、当時の人々には馴染みであつた人麿歌の明石、赤人歌の若（和歌）の浦という一对を連想させ、明石の御方、紫の上というふたりを、初めて登場する物語のなかで、対をなすような重要な存在として意識させるということがあるのではないかと考えられる。そして、明石巻では、光源氏が明石の御方と初めて逢う場面の直前に、「若（和歌）の浦」と密接に関わる「玉津嶋」を詠んだ歌が引歌とされ、紫の上が「恋しき人」として思い出されるのも、あたたかも若紫巻の場合と逆ではあるが、同様のことが言えるので

はないかと思われる。

六

『源氏物語』における紫の上と明石の御方の関係については、従来、対比であるとか、対照的あるいは対偶的といった表現で言及されている。若紫巻と明石巻のふたりの登場の仕方、ともに『万葉集』にも見える歌枕の明石と若（和歌）の浦、並称される万葉歌人の人麿と赤人、これらを背景に置いたとき、紫の上と明石の御方が、一対を成し、二人ながら物語の中で重要な役割を果たしていくことは、既にここに予告されていると見てよいだろうと思うのである。

また、若紫巻は、本稿のはじめに述べたように、『伊勢物語』の影響を大きく受けているとされ、それはそれで首肯できるのであるが、『古今集』仮名序やその古注、当時の万葉理解など、当代の和歌史的状况も考慮する必要があるのではないかと思量するのである。

(注)
(1) 秋山虔編『源氏物語必携』（學燈社・一九八一年。後藤氏はその注に、玉上琢彌「源氏物語の引き歌―その種々相―」(『国語国文』一九五八年八月号)、石川徹「源氏物語若紫巻の構想

に就いて」(『日本文学研究』創刊号・一九四九年六月、後に『古代小説史稿』(刀江書院・一九五八年)所収)等を挙げている。

(2) 「若紫の登場―光源氏「北山行き」の精神史―」(『野州国文学』第四〇号・一九八七年二月、後に『源氏物語の精神史研究』(桜楓社・一九九三年)所収)

(3) 以下、適宜、小学館新編日本文学全集本の該当箇所を巻数・頁で示す。

(4) 武田宗俊『源氏物語の研究』(岩波書店・一九五四年)、風巻景次郎『源氏物語の成立に関する試論―紫の上と明石の上との物語―』(『國語國文研究』第九号・一九五六年三月)、阿部秋生「明石の君の物語の構造」(『源氏物語研究序説』(東京大学出版会・一九五九年)所収)など。

(5) 「第三章 源氏物語に於ける構想の発展の内部徴証による考察」(『源氏物語の研究』(東寶書房・一九五七年)所収)。明石の御方の年齢の問題について、竹内正彦氏は、「この世と異なる時空に住まう異郷の女の属性から考える余地もあるのではないか」(『源氏物語事典』(大和書房・二〇〇二年)所収「明石の君」とされる)。

(6) 「序章 正編の主題と構想」(『源氏物語構成論』(笠間書院・一九九五年)所収)

(7) 「明石姫君構想とその主題」(同右)

(8) 「源氏物語の桜」(鈴木一雄監修『源氏物語の鑑賞と基礎知識5 若紫』(至文堂・二〇〇二年四月))

(9) 覆刻日本古典文学館「源氏物語 奥入」(日本古典文学刊行会・一九七一年)による。

(10) 伊井春樹編『松永本 花鳥余情』(源氏物語古注集成1、桜楓

- 社・一九七八年)によるが、引用に際し、私に本文に濁点・句読点を施した。
- (11) 新日本古典文学大系13『続日本紀 二』(岩波書店・一九九〇年)による。
- (12) 冷泉家時雨亭叢書42『源氏積・源氏狭衣百番歌合』(朝日新聞社・一九九九年)所収の『源氏積』の影印によるが、引用に際し、私に濁点を付した。
- (13) 中野幸一編『岷江入楚』(源氏物語古註釈叢刊6、武蔵野書院・一九八四年)による。
- (14) 『花鳥余情』に、「なにがしのたけは惣じては所をさだむべからず。別してはあさまのたけをいふべきにや。ふじあさまと対していふ故なり」とある。
- (15) 安田喜代門『古今集時代の研究』(六文館・一九三二年)、片桐洋一『柿本人麿異聞』(和泉書院・二〇〇三年)は、人麿を崇拜するというその当時の時代の流れであったとする。
- (16) 紫の上と明石の御方の二人の関係について、島内景二「二人の妻の対立と和解のかたち―紫の上と明石の君」(新潮選書『光源氏の人間関係』(新潮社・一九九五年)所収)は対比、三浦幸子「紫の上と明石の上―若紫巻における明石の挿話をめぐって」(『成城国文学』第十一号・一九九五年三月)は対照的、森一郎「源氏物語の局面的リアリティーと背後的世界の伏在」(『源氏物語の展望 第二輯』(三弥井書店・二〇〇七年)所収)は対偶的とそれぞれ述べられる。

(かねだ よしひろ・本学博士後期課程在学)